

もう一度見直そう 慢性腎臓病と急性腎障害パート2

宮本 賢治

エンジェル動物病院 院長・日本小動物血液透析協会 会長

はじめに

慢性腎臓病(CKD)および急性腎障害(AKI)に関する国際獣医腎臓病研究会(IRIS)の提唱する定義および病期分類、ヒトの医学、実験動物、および犬猫の研究から得られたCKDおよびAKIに関係深い病態生理と治療については既に本誌で10回に分けて概説してきた。

しかし、著者のホームページを介して全国から寄せられる犬猫の腎臓病に関する相談に応じていると、CKDとAKIの概念は未だ小動物臨床において定着していないのではないかという疑問を抱かざるを得ない。IRISの委員であるElliottとWatsonは「IRISの病期分類は安定状態の犬猫だけに適用することを強調しておく。短期間に血中Cr濃度が大きく変化した腎機能異常を示す動物に適用するのは間違いである」と指摘している¹⁾。

一方、IRISの委員であるCowgillは「AKIの病期分類はCKD

病期分類と異なり、腎臓病が安定状態にあることを意味するものではない。AKIの病期はむしろ疾患経過中の一時期を表すもので、疾患が悪化、改善、あるいはCKDへの移行と変化することを予測している」と指摘している¹⁾。

全国から寄せられる相談で最も多いのは、10歳を超える高齢の動物で、既にCKDの診断を受け、長期間治療を受ける中で急激な腎機能の低下を発症し、掛かりつけ獣医師からCKDの急激な進行により末期状態に陥ったと診断され、予後不良の判定を下されたが、延命できる治療法はないものだろうかという切実な訴えである。さて、読者の先生方はCKDの高齢動物でAKIを発症した患者をどのように考え、どのように治療しておられるのだろうか。パート2ではこのCKDの急性増悪について解説する。

CKDの急性増悪の臨床像

CKDにAKIが重複した犬猫の急性増悪患者を詳細に解説した文献はないが、IRISの提唱するAKI病期分類の中でCowgillが仮想患者を用いて下記のように解説している¹⁾。

この解説からCowgillのCKDの急性増悪に対する認識を要約すると次頁のようになる。

第1病日	第2病日	第3病日	第4病日	第5病日
2.3 CKD	2.5 CKD	2.7	3.5	2.4
● 非AKI	● 第I期	● 第II期	● 第III期	
数値は血中Cr濃度(mg/dl)				

●解説：この患者は8歳の猫で、腎盂と尿管に結石の病歴があり、以前にCKDの第II期と診断されている。今回、この猫は元気消失、嗜眠、および食欲不振を主訴とする急性疾患で来院した。初診時の窒素血症はCKDの病歴の水準であったが、第2病日には0.2 mg/dl増加した。

しかし、第3病日になるとCrは(48時間以内に)基準値から0.4 mg/dlも増加し、先在するCKDに第III期のAKIが重複した状態と診断した。第4病日には治療にもかかわらずAKIは悪化した。第III期の範囲内であった。病期を連続的に更新すれば体系的に臨床経過と腎障害を評価できる。第5病日には病期を第II期に変更し、治療が効果を現し始め、腎障害が軽減していることを伺わせる。

※ NJK は、みなさんで作る雑誌です。症例紹介、ご質問、ご意見をお寄せください。